短 報

乳頭分泌を主訴とした乳腺原発扁平上皮癌の1例

自治医科大学病理学教室

野首 光弘 本望 一昌 久保野幸子 川井 俊郎
斎藤 建

I. はじめに

乳癌の大部分は腺癌であり、純粋な扁平上皮癌はまれである。今回、乳頭分泌を主訴とし、穿刺にて診断された、乳腺原発扁平上皮癌を経験したので報告する。

II. 症 例

患 者：63歳，女性

主 訴：乳頭分泌

既往歴・家族歴：特記すべきことなし

現病歴：1994年7月，左乳頭より膿性分泌物あり当院外科を受診。塗抹細胞診が施行され，また，左乳房3時方向に2cm大の腫瘍が触知された。一週間後，腫瘍の穿刺吸引細胞診が行われた。肺・食道など他の組織に腫瘍を認めず，原発性乳癌の診断で同年8月左乳房切除術が施行された。

乳頭分泌物細胞像（直接塗抹法）：好中球・壊死を伴う非常に汚い背景に，多数の扁平上皮系細胞を認めた。その大部分は，ghost化を示すオレンジからライトグリーン好性でやや厚みのある胞体を持つ細胞や，dyskeratosis様の細胞であった。核が濃染するbizarre

な細胞が少数認められた（写真1a）が，炎症による乳管上皮の扁平上皮化生の可能性を考え，陰性と判定した。

穿刺細胞像：やはり好中球を背景に，孤立性ないしは平面から軽度重積性を示す集塊状に，類円から楕円

写真1 a：核崩壊を示すオレンジ好性の細胞。分泌物中に異型細胞は乏しかった
b：cannibalismがみられる。穿刺細胞診ではクロマチンの凝集を示す大型核細胞が大量に採取された（a，bともに対物100倍，同拡大）

Squamous cell carcinoma of the breast with nipple discharge: A case report

Mitsuhiro NOKUBI, M.D., Kazumasa HONMOU, M.T., Sachiko KUBONO, C.T., I.A.C., Toshiro KAWAI, M.D., M.I.A.C., Ken SAITO, M.D.

Department of Pathology, Jichi Medical School

論文別刷請求先 ☎ 329-04 栃木県河内郡南河内町 自治医科大学病院病理部 野首光弘

平成7年1月26日受付

平成7年4月28日受理

写真2 腫瘍の組織像。胞巣の中心部では核濃縮や核の消失がみられる(対物20倍)

形核, 細から粗顆粒状あるいは濃縮したクロマチンをもつ異型細胞が出現していた。その胞体はライトグリーンからオレンジ好性で厚みがあり, 中心核であった。cannibalism (写真1b), 層状構造もみられ, 扁平上皮癌と診断した。

病理所見: 摘出された乳房は $20 \times 19 \times 6$ cm で, 皮膚とは離れて, 乳頭から5 cm 外側の乳腺に, $23 \times 13 \times 10$ mm の白色腫瘍結節が認められた。腫瘍上皮は重層構造・明瞭な細胞間橋を有し, involucrin の免疫染色陽性細胞を含んでいた。著明な好中球浸潤を伴い, 表層の細胞は核の消失を示すものが多く異型に乏しかった(写真2)。表皮型の角化はみられなかった。腺癌の像を示す部位は認められなかった。腫瘍は導管内から周囲脂肪織に浸潤し, myxofibrous な間質増生を伴っていたが, 肉腫様成分はみられなかった。脈管浸潤像は認められなかった。

腫瘍結節以外の乳腺組織も全割して検索したところ, atypical hyperplasia²⁾に相当する上皮増生を広汎に認めたが, 重層扁平上皮はみられなかった。腋窩および鎖骨下リンパ節に転移はなかった。

III. 考 察

浸潤性乳管癌の約4%に扁平上皮成分を含むものがあり, 「化生を伴う乳癌」^{1,2)}という範疇にまとめられている。そのなかでも, 扁平上皮成分のみより成るものを「扁平上皮癌」というが, 非常にまれである。本例は, 腫瘍結節部の組織学的検索で腺癌の像を示す部

分がみられず, 扁平上皮癌と診断された。細胞間橋が明瞭であったことに加え, involucrin 陽性細胞の存在は, 腫瘍細胞の重層扁平上皮への分化を示す所見³⁾と考えられた。

乳頭分泌物中の扁平上皮細胞は正常の乳管開口部あるいは乳頭表皮から付着する可能性があるが, 通常無核の扁平上皮細胞である⁴⁾。また, 乳頭腫・嚢胞・炎症などに伴って扁平上皮化生が認められることがあるという^{5,6)}。本例の分泌物には有核の扁平上皮細胞を認めたが, 好中球浸潤が強く, 炎症を伴う非腫瘍性扁平上皮との識別が困難であった。しかし, 手術標本では, 扁平上皮癌以外に好中球浸潤巣や扁平上皮化生はみられず, 組織所見をふまえた見直しにより, 本例の分泌物中には(低異型度の)扁平上皮癌細胞が出現していた, と判定は修正された。

通常, 分泌物中に癌細胞が出現するのは非浸潤性乳管癌や乳頭腺管癌などで, これらは核異型が目立たないものが多く, 乳頭分泌をきたす乳癌の細胞診陽性率は穿刺細胞診の陽性率に比べてかなり低いとされている⁴⁾。本例も, 乳頭分泌物の細胞診の難しさを教えられた症例となったが, 乳頭分泌をきたす乳癌として, まれではあるが扁平上皮癌も鑑別に加えておくべきものと考えられた。

文 献

- 1) Oberman, H.A. Metaplastic carcinoma of the Breast. *Am. J. Surg. Pathol.* 1987; 11: 918~929.
- 2) Rosen, P.P., Oberman, H.A. Tumors of the mammary gland. Washington: AFIP, 1993.
- 3) Walts, A.E., Said, J.W., Siegel, M.B., Banks-Schlegel, S. Involucrin, a marker of squamous and urothelial differentiation. An immunohistochemical study on its distribution in normal and neoplastic tissues. *J. Pathol.* 1985; 145: 329~340.
- 4) 藤井雅彦, 石井保吉, 萩原 勁. 乳腺の細胞診—乳頭分泌物—。病理と臨床 1989; 7: 臨時増刊—腫瘍細胞診— 184~193.
- 5) Flint, A., Oberman, H.A. Infarction and squamous metaplasia of intraductal papilloma. *Hum. Pathol.* 1984; 15: 764~767.
- 6) Eggers, J.W., Chesney, T.M. Squamous cell carcinoma of the breast. *Hum. Pathol.* 1984; 15: 526~531.